

ヴォーチェ弦楽四重奏団 2014年夏・トロワ・レポート

音楽祭のポスター(トロワ駅のホームにて)



11月下旬から日本全国ツアーを行うヴォーチェ弦楽四重奏団は、ジュネーヴとのつながりが強い。パリ国立高等音楽院で出会って2004年に結成、2006年のジュネーヴ国際音楽コンクールに最高位で入賞し、日本デビューを果たす。さらにボルドーやロンドン等のコンクールでも受賞を重ねた。2013-14年シーズンには欧州コンサート・ホール協会の「ライジング・スター」に選ばれて、ロンドンのバービカン・ホール、ウィーンのコンツェルトハウス、アムステルダム・コンセルトヘボウを含む欧州20か所の名門ホールで演奏する機会を得た。

2006年にジュネーヴのコンクールで初めて彼らに会ってから、早8年。成長したヴォーチェの4人と再会したのは9月上旬、フランス北部の小都市トロワ等で行われた室内楽の音楽祭だった。アルバン・ベルク弦楽四重奏団のチェリストだったヴァレンティン・エルベンが音楽監督を務め、自ら楽器や椅子を運び出すほどの手作りの音楽祭だが、質は高い。マスタークラスが縁で招待されたヴォーチェを、恩師エルベンは手放しで褒めていた。「ますます音に深みが増してきています」。ヴォーチェが師事していたイザイ四重奏団のギョーム・シュートル、エルベンも参加してチャイコフスキーの弦楽六重奏曲「フィレンツェの思い出」をフィナーレに演奏した。「恩師と共演できたのはとても感動的でした」。



16-17世紀の古い漆喰の家が多く残る

パリを本拠地とする彼らは、すでに、日本、アメリカ、アフリカにもツアーを行っている。「もうコンクールは卒業し、演奏活動に専念できるのがうれしいです。演奏会は年間約80回、内容はみんなで決めます。第1と第2のヴァイオリンも交替で演奏します」。

来日プログラムは、モーツァルトやベートーヴェンの「ラズモフスキー第2番」などを基本とし、ヴィオラに愛する心を秘めたヤナーチェクの「内緒の手紙」、ブラームスの「クラリネット五重奏曲」も含まれる。

ジュネーヴといえば、来日公演で共演する萩原麻未と出会ったところでもある。萩原が2010年に日本人として初めてピアノ部門で優勝した後、受賞者コンサートで共演して強い絆で結ばれ、昨年ベルリン・フィルハーモニーの



ステンドグラスがとても美しいトロワのカテドラル



演奏会後
バックステージにて

室内楽ホールでも共演している。日本で演奏するフランクの「ピアノ五重奏曲」はその時の作品であり、初めて共演するドヴォルザークの「ピアノ五重奏曲」は、その自然な延長線上にあるといえるだろう。萩原の印象を聞くと、「大好き！ 驚異的なピアニストです。ピアニシモも高域の音も、とても繊細なんです」と愛情たっぷり、情熱をこめて話していた。

秋島百合子(ロンドン在/ジャーナリスト)